

パリの郊外に田園都市を建設する

——一九二〇～五〇年代のシュレーヌ——

中野隆生

はじめに——問題の所在——

ご紹介にあずかりました中野でございます。どうぞよろしくお願
いいたします。

私は、この十数年間、フランスに二年に一回くらい行き、これか
らお話しする小さな町の文書館に通い詰めております。一カ月ぐら
いの滞在でしょうか。滞在と滞在のあいだに一〇カ月間ほどありま
すので、どうしても同じ作業を繰り返してやっているような感じに
なってしまうのですが、しかし、二〇一四年度に長期研修期間をいた
だいたおかげで、曖昧だった事実をかなりはっきりさせることがで
きました。今、私が話すとすれば、この町シュレーヌのことしかあ
りません。

私は、二十世紀フランスを社会的に研究するにはどうしたらいい
のかと悩みながら、できれば一つの都市、しかも居住環境とか政
治的事情とかいろいろ知りうる条件のそろった一都市をとりあげて、

集中的に調べてみたいと考えてきました。そうした検討の対象たり
うる事例として、田園都市の存在で名の知られたシュレーヌに狙い
を定めることとし、以後、十数年間にわたって研究してきたとい
うわけです。ここに来てシュレーヌの研究にも多少は目鼻がついてき
ましたので、それについてお話しを聞いていただいてもあまり不都
合はないかなと思っております。

近現代都市史を勉強していますと、ヨーロッパにしても日本にし
ても、十九世紀末から二十世紀初めは一大画期であると思われてき
ます。第一に、交通網が充実して、それを背景に都市空間が急速に
拡大します。この動きは十九世紀末～二十世紀初めにはじまり、そ
の後、全面化していくことになりました。都市空間の拡大という事象
は、単なる拡大にとどまらないわけで、そこから様々な都市問題が
派生してくることもありますが、十九世紀までを扱う都市史の視
座や方法ではそういった現象を必ずしもうまくとらえられないよう
に感じていました。したがって、その後につづく二十世紀の都市史を

どう考えるかが私にとつての重要な課題となってきました。二十世紀都市史の諸課題に取り組みながら、個人のレベルから国家のレベル、さらにはそれを超える大きなレベルまで、フランス社会を見通してみたいわけです。

ということで、十九・二十世紀転換期から、第二次世界大戦直後の一九五〇年代にかけての時期にフランスで計画され建設される田園都市を取り上げ検討するのが、本講演の課題となります。地球上におけるフランスの位置を知らない方はいらつしやらないでしょうか、そのフランスの首都パリがどこにあるかを確認しておきますと、フランスでもかなり北の方に位置しています。私が取り上げるのは、そのパリの郊外にある小都市シュレーヌです。現在ではパリの都心から三〇分ぐらいで行くことができます。プロ・ニュの森の西側に立地するなかなか好ましい住宅都市です。もともと、第二次世界大戦の前までは、航空機工場とか香水工場とかが操業しているかなりの工業都市でした。今ではそういった工場は残っていません。都市問題が新しい様相をおびはじめた二十世紀の初め、社会変革を目指す立場から、田園都市という都市像がイギリスのエベネザ・ハワードによって提唱されます。彼の著書が、十九世紀末に初版として、二十世紀初めには改訂版として出版されました。ハワードにはアメリカで仕事をした経験があり、アメリカのことを熟知していました。そういう人物がイギリスに戻ってから田園都市を提唱したのです。この点は二十世紀の都市を論じるとききちんと踏まえるべきことですが、そこにはこれ以上立ち入りません。

ハワードの田園都市論が公表されますと、時代背景も手伝って、

国際的な反響を呼びました。フランス、ドイツ、オーストリアなどのヨーロッパ諸国、また日本などに、田園都市の考え方は浸透していきます。日本へはアメリカ経由ではいつてきたと、一般にいわれています。

フランスでも早々に、ジョルジュ・ブノワレヴィによって、田園都市論やその事例を紹介する書物が出版されました。実際には、まず民間の工業家の手でいくつかの田園都市が建設されますが、しかし、本格的に田園都市が広がりはじめるのは、シュレーヌ田園都市の生みの親となるアンリ・セリエが、一九一〇年代初めに、低廉住宅公社という法的枠組みのなかで、パリ地方（セーヌ県）での田園都市建設を担うセーヌ県低廉住宅公社を設立してからのことになります。それを契機に公的な性格をおびた田園都市が建設される段階へはいつていきます。

ところで、シュレーヌ田園都市は一九七〇年代の末あたりから研究者の注目を集めました。その大きなきっかけはフランス社会党の勢力が伸び、一九八一年にミッテラン社会党政権が成立したことにあります。シュレーヌの田園都市はセリエという改良派社会主義者に主導されて建設されたこともあっておおいに注目され、なかなか社会改革の側面に光が当てられてきました。やがて、都市計画家や都市計画史家から、人間的な都市計画がセリエとその周辺によって実現したといった肯定的な評価がくだされるようにもなりました。歴史的な経緯を現時点で振り返ったとき、こういった評価は果たして通用するのでしょうか。

私は、田園都市が誰かの考えによって実現されたという見方を批

判的に受け止め、むしろ、どういう過程をへて田園都市がつくられたかを重視しようと考えています。シュレーヌ田園都市は一九二〇年代に建設がはじまりますが、一九五〇年代までにおよそのかたちが整います。しかし、その後も建設はつづいて二十一世紀にはいつてから、少しばかり残っていた土地にも新たな施設が建ち、すべての敷地が利用されている状態になりました。一世紀近くたつて、また様々な時代に跨つて、いわば「完成」の域に達したというわけです。その建設過程をたどり直し、どういうふうにな田園都市がつくられたのか、再考してみたいと思います。

一、パリの膨張と田園都市計画

まずはパリの都心の状態についてお話ししましょう。先ほど、十九世紀末から二十世紀初めにかけて大きな変化が生じ、都市空間が急拡大したと申しました。この点にもう少し立ち入ります。

一八六〇年、ティエール市壁（ティエールの壁）の内側にあった隣接各市の一部が編入され、そこにブローニュの森とヴァンセンヌの森を加えて、新たにパリの市域が画されました。その後も若干の変化はありますが、これがほぼ現在のパリ市域にあたります。他方で、隣接諸市は壁によって分断され市域も縮小したのです。この市域拡張の当時には、パリ市域のなかに、編入地区を中心にして、まだ建物のない空地が目立ちましたが、十九世紀末ともなるとほぼ建物で埋めつくされます。ちよつと空白が認められるとしたら大きな公園ぐらいでしょうか。それだけではなく、市域の外へ向かって都市空間はますます広がっていきます。シュレーヌのあたりはもちろ

んすでに都市化しています。さらに一九二〇年代ともなればパリ郊外の都市化された面積はより一層増大し、それ以降も郊外の都市化はとどまることを知りません。こういう都市空間の変遷をとらえる研究は地理学者の得意とするところで、私も彼らの研究成果に多くを負っています。

都市空間が膨張すると、それにつれていろいろな問題に浮上します。まず、パリ市内では、建物がはなはだ老朽化していたためもあって、居住環境が非常に過密な状態になっており、衛生上も様々な問題が存在していましたが、十九世紀末になると、民衆のあいだにも、パリを脱出して郊外へ引越そうと考える人たちが現れてきます。彼らは郊外に分譲宅地を購入して住もうとしますが、そういった需要にこたえて私的に所有されてきた広い土地が切り分けられ宅地として分譲されるようになります。宅地を購入した人びとはしばしば自力で家を建てたものでした。一方で社会基盤の整備が追い付きません。道路、水道、電気などが未整備のまま宅地が分譲販売される事態が珍しくなく、そのため、一九二〇年代のパリ郊外には、雨が降れば道が泥んこになるような劣悪な宅地があちこちに広がっていました。

こういった郊外のひどい環境をシュレーヌのような一つの町だけで解決できるかという点、もちろんできません。より広域での行政の展開が必要になります。そうした広域行政をおこなうとき、両大戦間期のフランスでは、国家が前面に出てくることはありません。そうではなくて、諸々の市が協力し合いながら行政を担います。パリの郊外には数十の小規模都市が存在していましたが、シュレーヌ

とか、隣町ピュトーとか、小さな自治体同士が連携してことにあたるわけです。民衆向けの住宅にかんしていえば、セーナ県という地方行政上の枠組みに即して、セーナ県低廉住宅公社が設置され、問題の解決へ向けた活動が開始されました。

セーナ県低廉住宅公社が計画した田園都市は十五カ所にのぼり、そのほかパリなど、各市が計画した事例もありました。こうした動きをリードしたのはすでに引いたアンリ・セリエという改良派社会主義者です。とはいえ、改良派社会主義者たちがはじめから田園都市をつくって社会改革を成し遂げようと考えていたわけではありません。第一次世界大戦の直前あたりから様々に勉強し研究しながら、田園都市を自分たちの目指すべき施策として打ち出していったのです。彼らにとって田園都市は新しい政策的選択肢の一つでした。こうして、一九一九年の地方選挙でセーナ県の諸市に社会党市政が誕生すると、田園都市の建設が現実化します。シュレーヌにも社会党市政が誕生してセリエが市長に就任し、彼の市政のもと、田園都市の建設が進行することになりました。

ここで、田園都市のことに触れておきましょう。もともとの提唱者、ハワードにとって、田園都市とはいかなるものだったのでしょうか。

ハワードの描く概念図によれば、田園都市は大規模中心都市（ハワードの場合はロンドン）の周りに建設され、鉄道によって中心都市と結ばれています。つまり、都市同士が有機的につながる地域が構想され、そこに田園都市は位置づけられているわけです。個々の田園都市についていえば、公的施設の集まる公共空間が真ん中に

あって、それを囲むように走る大きな道の両側には住宅が立ち並びます。その外側には工場の集まる地帯が設けられ、さらに外へ向かつては農地が広がります。ハワードの田園都市には生産に携わる工場や農地が組み込まれていたことに注意してください。公的施設のある中心部から、外へ向かつて、住宅地区、工場地区、鉄道を挟んで農地とつづく、人口三万程度の都市がイメージされていました。

実際に建設された田園都市を少し見ましょう。史上初の田園都市として知られるレッチワースは、ロンドンから北へ鉄道で三〇分ばかりのところにあります。この町には、一戸建て、あるいは数戸からなる連接住宅がグループにまとめられて散在し、また、住宅を包み込むように森が広がっています。中心部には公的建築物やマーケットが配置され、工場の立地すべき地区も町のなかに設けられました。大きな森があつて公園や庭も広く、パリ地方の田園都市に馴染んだ目には広々としています。レッチワースで具体化されたのが、もともとの田園都市概念図のままの地区配置でなかったことは確認しておきましょう。もう一つ、株式会社によって田園都市は建設され運営されました。このことにも注意しておくべきです。

二、全体プランの変遷

南北に流れるセーナ川で東を画されたシュレーヌでは、西方へ向かうとモン・ヴァレリアンの高みへ導かれ、その丘の頂上には地図上で星形に描かれる建造物が認められます。パリを守る要塞の一つ、モン・ヴァレリアン要塞です。一八七一年にはパリ・コミューンの戦士が立てこもってヴェルサイユ政府軍と戦いを交えました。この

要塞を抱く丘の中腹の高台には南北に細長い住宅地がつづき、その南端にあった農場の跡地に田園都市が生まれることとなります。また、田園都市の南端を東西に走る道路を挟んで、向こう側には隣町サン・クルーの競馬場が広がっています。

シュレーヌ田園都市の全体プランへと話題を転じましょう。まずは一九一八年のプラン（図1）。田園都市の建設が未着手であった時期の全体図です。つづく一九二七年の全体プランでは（図2）、東側に三角形の敷地が付け加わっています。買収された時期の確定は難しいのですが、一九二五年か一九二六年でしょう。敷地の拡張以外にも部分的な変更が認められます。これら二プランに見られる住宅はほとんど複数の住戸が組み合わされた戸建ての連接住宅です。北辺を東西に走る大きな道、および中央部分をやはり東西に貫く広い道にそって五階建て集合住宅がわずかに並びますが、それ以外の描かれている住宅はほぼ戸建てのみです。第三のプランは一九二九・三〇年に作成されました（図3）。プラン右下には共同施設の凡例が載せられ、A、B、C…で位置が示されていますが、これら共同施設すべてが実現したわけではありません。建設済みの区域はともかく全体に明らかな変化が生じています。先行する全体プランでは戸建て住宅がほとんどだと申しましたが、そのかなりの部分が集合住宅に取って代わられています。それでも一九二九・三〇年プランには連接の戸建て住宅が随分ありましたが、一九三三年のプランになるとかなり減って集合住宅の割合がことさら高まっています（図4）。このように、全体プランが改められると、そのたびに新たな変化が生じているわけです。この点に注意してください。

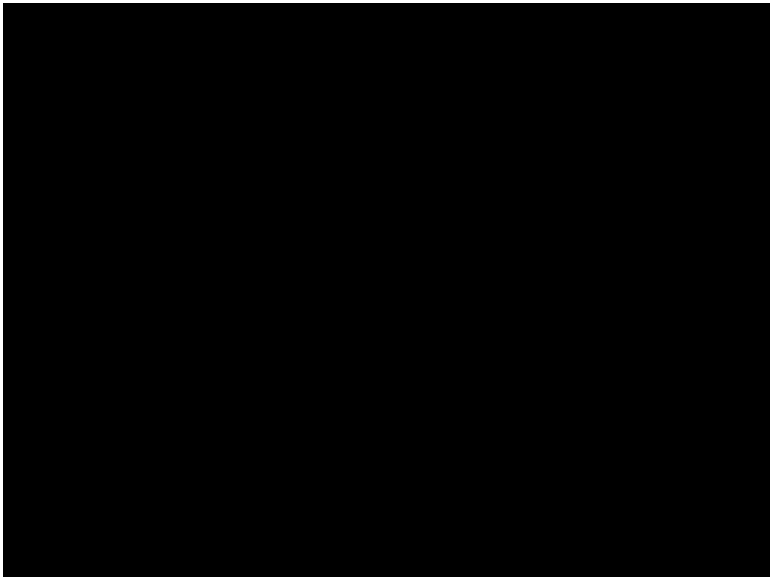


図1 シュレーヌ田園都市全体プラン 1918年

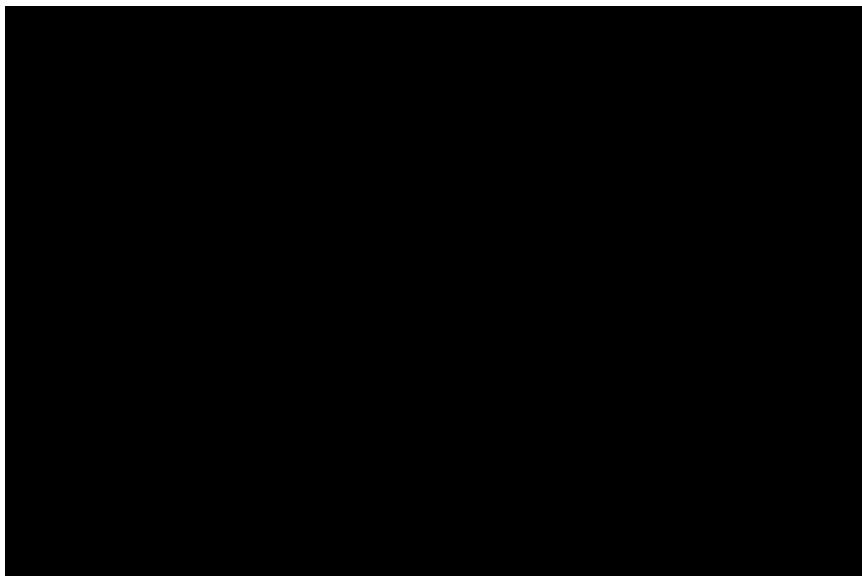


図2 シュレーヌ田園都市・全体プラン 1927年

出典 *Idées de cité-jardins. L'exemplarité de Suresnes*, Ville de Suresnes, 1998, p.26

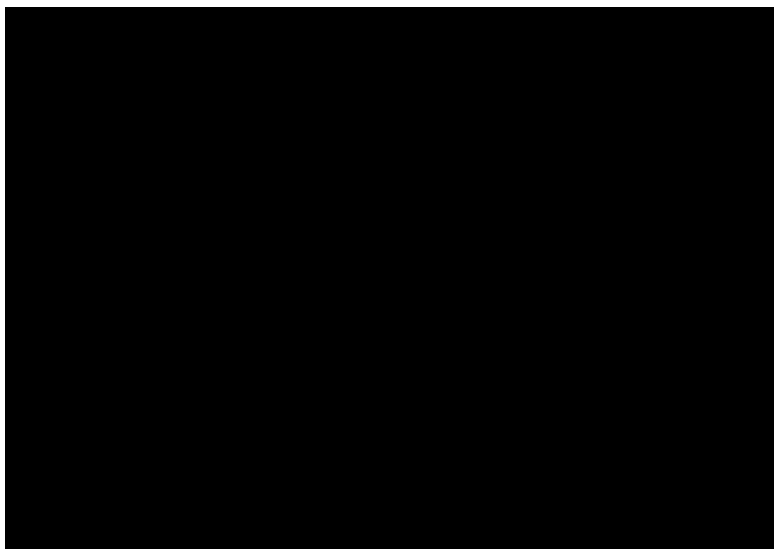


図3 シュレーヌ田園都市・全体プラン 1929・30年

出典 中野隆生「膨脹するパリとアンリ・セリエー両大戦間期の都市空間をめぐって一」、
『メトロポリタン史学』、創刊号、2005年、81頁。

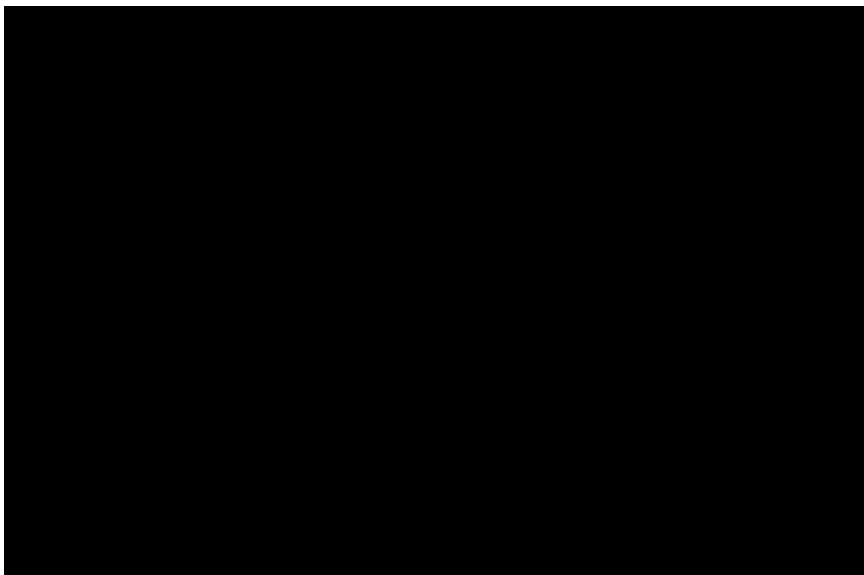


図4 シュレーヌ田園都市・全体プラン 1933年

出典 中野隆生編『二十世紀の都市と住宅 ヨーロッパと日本』、133頁。

大筋で変化をとらえれば、シュレーヌ田園都市建設の十数次の事業は三段階に分けることができます。第一の段階は一九二〇年代の二つの全体プランに即して実施された第一次事業と第二次事業です。一九二九・三〇年と一九三三年のプランによる第四次から第七次までの諸事業が第二の段階で、大幅な変更が加えられたことはすでに述べた通りです。第二次世界大戦を区切りとして第三の段階がはじまり、そのあとも長く建設はつづきました。

三、建設過程

実際の建設に即してより具体的に変化を確認していきましょう。建設過程を示した図は、これからの話にとつてたいへん重要である(図5)。共同施設の開設(ないし開業)年に疑問符の付いた箇所がありますが、それははっきりと年代確定ができなかったからです。一部の大都市を除いて、個別の都市にかんする歴史研究はまだまだ進んでおらず、公共施設などにかんする年代が必ずしも確定できないのです。この図の年代は筆者の検討結果を反映させたもので、できるかぎりの正確さを追求しましたが、今後、変更が必要になる可能性は残ります。

シュレーヌ田園都市の建設事業は、第一次以降、順次、進められていきました。第一次事業では、二階建ての戸建て住宅(複数住戸の連接住宅)と五階建て集合住宅が建てられ、一九二四年に竣工したと思われます。この事業においては、戸建て住宅であろうと集合住宅であろうと、浴室ないしシャワー室のある住戸はまったく建てられていません。第二次事業になりますと、一部にシャワー室の付

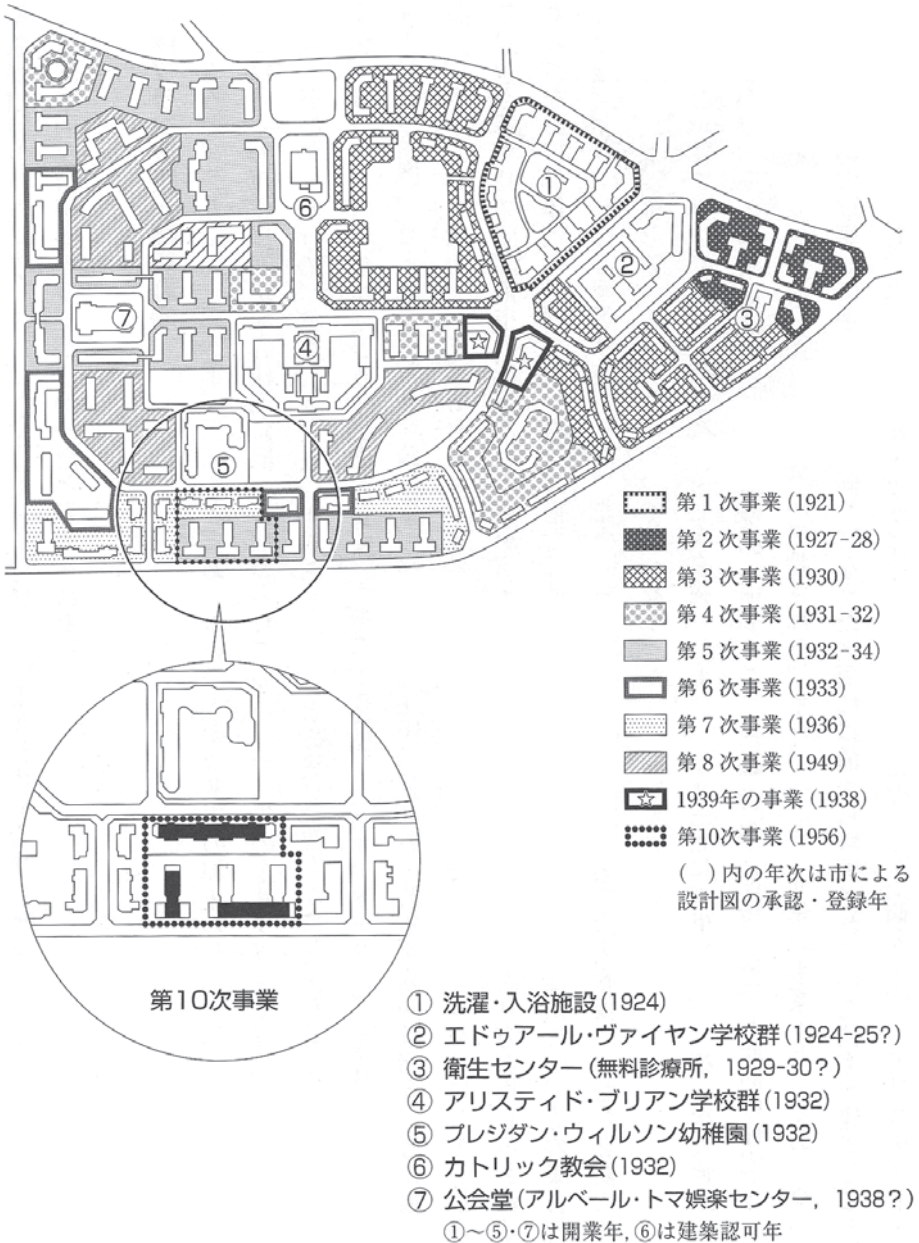


図5 シュレーヌ田園都市の建設過程

出典 中野隆生編『二十世紀の都市と住宅 ヨーロッパと日本』、132頁。

いた住戸が現れます。全ての住戸にはありません。したがって、一九二〇年代には、洗濯と入浴の共同施設が不可欠であり、実際につくられました。ところで、最初の段階ではどの住戸も入浴施設なしとしてプランがつくられていたにもかかわらず、一九一八年の全体プランでは第一次事業区画の中央には戸建て住宅しか描かれていません。共同施設はないのです。一九二七年の全体プランには共同の洗濯・入浴施設が登場してきます。このことは、当初は建設を考えていなかった施設の必要性がのちになって認知されたことを示唆しています。他方、この第一段階における戸建て住宅の屋根は傾斜のついた伝統的な屋根でした(図7)。

一九二九・三〇年の全体プランでは大幅な変更が加えられました。シュレーヌ市やセーヌ県低廉住宅公社の目指す方向に変更があったからでしょう。まず、集合住宅の比重が増大し、一方で共同施設が飛躍的に充実しました。新たな全体プランにしたがえば、高齢者向け住宅のほかに、独身者向け集合住宅や、ホームレスのための集合住宅が計画されています。現実には、ホームレスの住居の代わりに多子家族向け集合住宅が建てられました。肝心なのは、高齢者、独身者、ホームレス、多子家族といった恵まれない人びとのための住居が考えられたという事実です。ここに社会改革的にして人間的な配慮を見ることは必ずしも的外れではないでしょう。こうした住宅の建設が、第三次事業から第七次事業までつづきました。シュレーヌ田園都市建設の第二段階です。第四次、第五次、第七次の各事業についてやや詳しくお話しいたします。

第四次事業では戸建て住宅と集合住宅が誕生しました。戸建て区



図6 第一次事業・集合住宅 筆者撮影(2011年)



図7 第一次事業・三戸建て住宅 筆者撮影（2011年）

画についていえば、その真ん中に高齢者向け住宅が、それを囲むように連接の戸建て住宅が建てられます（図8、図9）。高齢者向け住宅は別にして、この区画の戸建て住宅には必ず浴室かシャワー室が設けられました。いずれもはや傾斜のある伝統的屋根ではなく、平屋根になっています。一方、田園都市敷地の北西端には多子家族向け集合住宅が建設されました。子どもの多い低所得家族のためのこの住宅には浴室もシャワー室もありません。なお、多子家族向け集合住棟に囲まれた区画中央部の地下には、ガレージがつくられました（現在はスパーマーケット）。ぼちぼち自動車が使われる時期になりつつあったからでしょう（図10）。

第五次事業では、田園都市の中核部分ともいべき「国際連盟」の名を冠した広場（現在のスターリングロード広場）が生まれまされた。広場は五階建て集合住宅で囲まれ、集合住宅の一階には店舗スペースが設けられています。広場へはいる六本の道のうち三本は、集合住棟と集合住棟をつなぐアーチをくぐり抜けます。やや遅れて、広場の中央には公会堂（のちの劇場）がつくられました（図11）。なお、第五次事業と第六次事業で建てられた住棟は五階建て集合住宅に限られています。

第七次事業は第二次世界大戦前の最後の事業です。この事業においては、それまでに見られなかった建物が登場します。基本的には、二階建て戸建て住宅と五階建て集合住宅で構成されていましたが、複数戸が組み合わされた二階建て住棟の中央部分が三階建てになっている建物や、四階建てでありながら中央部分にアトリエ付き住戸があるためそこだけ高くなっている住棟が建設されました（図12）。



図8 第四次事業・高齢者向け住宅 筆者撮影（2011年）



図9 第四次事業・八戸建て住宅（平屋根に注意） 筆者撮影（2011年）



図10 第四次事業・多子家族向け集合住宅（中央の構造物の下がガレージ） 筆者撮影（2014年）



図11 第五次事業・集合住宅（スターリングラード広場、右手に劇場がある） 筆者撮影（2011年）

極め付けは一部が八階建てになっている集合住棟で、田園都市敷地の南西端に建てられます(図13)。異論が予測されたのでしょうか、建築家メトラスは南西の境界に位置するのであえて高くする意味があると述べて、セーヌ県低廉住宅公社を説得しようとしています。

シユレーヌ田園都市のなかで住棟の高さに変化をつけた前例がほかにないわけではありませんが、二階建て、五階建てはもちろん、三階建て、四階建て、八階建ての住棟が生れた第七次事業からは一九二九・三〇年、一九三三年の両プランに貫かれていた原則やイメーヂが揺れているような印象が残ります。こうした動きに近代主義建築運動など、建築思想の変化の影響を読み取ることは難しくないように思われます。

こうして第三次〜第七次の事業を通してみれば、様々な構成の家族(世帯)や多種多様な事情にある人びとに適合させるべく、各種各様の住宅や住棟が現出しました。こうした建設の第二段階には社会改革的で人間的な眼差しを見出すこともできそうです。

ところで、第二次世界大戦の前夜になっても旧農場の古い建物がいくつが残っていました。これを解体して従前のプランの未着工部分を完成させたのが、「一九三九年の事業」です。管見の限り、第九次事業という呼称は資料に現れませんが、「一九三九年の事業」がそれにあたるはずです。

第二次世界大戦後に実施された第八次事業へ話を移しましょう。具体化の計画は「一九三九年の事業」より早く策定されたと推測されます。やはり五階建て集合住宅が建てられましたが、主要な建材として使われたのはやはりレンガではなく白い石材です(図14)。



図12 第七次事業・集合住宅(中央にアトリエ付き住戸、左右両端は三階建て)
筆者撮影(2015年)



図13 第七次事業・集合住宅（一部が八階建てである） 筆者撮影（2015年）

また、集合住棟のなかの住戸の規格化がさらに進みます。その延長線上にあるのが第十次事業によって誕生した八階建て集合住棟です（図15）。これは戦災で破壊された建物に代えて建てられたものです。ドイツ占領下におかれたバリ地方のなかでシュレーヌは工業が盛んでしたから連合国軍による爆撃の標的になり、田園都市の一部も誤爆されて三〇人ほどの死者が出ました。この八階建て集合住棟を田園都市というにはいささか無理があります。むしろ大規模住宅地と呼ぶべきでしょう。この種の建物としては、セーヌ県低廉住宅公社によるドランシー・ラ・ミュエット田園都市という先例があります。

ユダヤ人の収容所になったことでよく知られますが、通常の集合住宅として使われたことはありませんでした。また、高層の部分は早々に解体され、現存してはいません。ドランシー・ラ・ミュエットほどの高さではないにせよ、シュレーヌにも八階建て集合住棟が出現し、それまでの田園都市的な景観を破ることになったのでした。

四、共同施設

一九一八年のプランにはなかった洗濯と入浴のための共同施設が、一九二〇年代になって第一次事業区画につくられたことはすでに指摘しました。他方で小学校は当初からプラン上に描かれています。エドゥアール・ヴァイヤンと呼ばれる第一の学校群です。もともと、一九一八年プランのあとで学校の敷地は拡張され校舎も増築されています（図16）。ここには男子初等学校、女子初等学校、幼稚園が同居しており、それぞれに校長が配置されていました。

エドゥアール・ヴァイヤン学校群にかんする資料を検討するなか



図14 第八次事業（白い石材が使われている） 筆者撮影（2014年）



図15 第一〇次事業・集合住宅（八階建てである） 筆者撮影（2014年）

で、私は次のように考えはじめました。すなわち、田園都市建設の進行にともなって、また全体プランの変更にともなって就学児童が増加しますが、これに対応するため、施主側が敷地を買い増して校舎を増築したのではないかと。当初計画の段階から徐々に居住家族が増え、通学する児童や生徒も増えることはわかっていますが、全体プランに占める集合住宅の比率が大きくなれば、子どもの増加スピードは予定より速まります。その結果、学校は手狭になり、増築を強いられます。事実、エドゥアール・ヴァイヤン学校群では増築がおこなわれています。ちなみに、この学校群は、本来なら一九二〇年代の初めに開校の予定でした。ところが、なかなか開校せず、どうやら二年ほど遅れて開校したらしく思われます。いつ本当に開校したのかよくわかりません。しかも、開校したあとも工事がつづいている感じがします。これが図5の開業年に疑問符を付けた理由です。

ところでこの学校群の設計や用材納入に携わったのはほとんどがパリの業者でした。また、それぞれの学校には、隣接諸市の子どもたちが、かなりの人数、通ってきていました。このことには注意を促しておきましょう。子どもたちについては市の文書館の所蔵する資料から明らかになりますが、各学校の教員についてはわかりません。公教育の人事は国家が担っていたからです。先生たちもシユレーヌ以外にもやって来たかと推測されますが、どこに住んでいたかを知るための情報は手元がありません。さらなる調査が必要なのです。

エドゥアール・ヴァイヤン学校群が手狭になるといった事情を背



図 16 エドゥアール・ヴァイヤン学校群 筆者撮影 (2015年)

景にして、一九二九・三〇年の全体プランには、アリストイド・プリアン学校群（現在のアンリ・セリエ中等学校）が出現します。田園都市の中核部に設立されたこの学校には、エドゥアル・ヴァイヤン学校群から男子初等学校が移され、同時に技術関係の職業学校が設けられました。また、南側に新たな幼稚園（ブレジダン・ウィルソン幼稚園）がつけられました。一方、エドゥアル・ヴァイヤン学校群には女子初等学校と幼稚園が残りしました。この第二学校群も田園都市やシュレーヌの住民だけを受け入れていたわけではなく、隣接諸市からも生徒が通学してきました。このあたりの事情や第二学校群設置の背景などについては、就学児童数の変遷などがわかれば、もつとはつきりとしたことが語れるように思いますが、資料的な限界は小さくありません。

無料診療所（計画当初は衛生センター）にも言及しましょう。今は図書館として活用されています。もとは医者が乳児や幼児を診察したところです。医者は全員がパリ在住でした。他方、診察を受けに来るのは田園都市の人たち、シュレーヌの人たちが中心ではありましたが、隣接諸市からの人も含まれていました。無料診療所もまた外へ向かって開かれていたのです。セーヌ県低廉住宅公社から貸与された土地にシュレーヌ市が設置し、運営責任は市にありました。しかし、実際の運営は世俗的事業団に委ねられていました。

そのほか、教会の建設がかなり早い段階からはじまっていたことが、建築家メトラスによる航空写真のおかげで確認できます。セーヌ県低廉住宅公社が供与した土地にカトリック側が建てました。また、先ほど第五次事業にかんして述べるなかで出てきた公民館です

が、これを建てたのはセーヌ県低廉住宅公社でした。当然のことながら、教会や公民館は外に開かれていました。

こうして、一九三〇年代には共同施設が充実し、住民のための活動を展開しましたが、それはシュレーヌ田園都市のなかで完結していたわけでは決してありません。建設そのものが外部の助力なしには困難でしたし、外と隔絶されては共同諸施設の運営も不可能でした。共同諸施設の利用者が田園都市やシュレーヌの住民に限定されていたわけでもなかったのです。ところで、一九三三年の全体プランに記されている共同施設のなかには、実際に建てられなかったものが含まれています。もともと予定されていたながら建設されないで終わるといえるのは、状況が変われば計画も変更されたことを示唆します。新しく付け加わるものもあれば、計画倒れに終わるものもあつたわけです。計画が実現しないまま、空地として長く残される区画もありました。そうした空地には、第二次世界大戦後も随分遅くなつてから、新たな装いの共同施設が整備されたりしたのです。

五、シュレーヌ田園都市の建設をめぐる若干の考察

いろいろとお話ししてきましたが、そこから何がいえるのでしょうか。

まず施主の狙いからです。つまり、アンリ・セリエであり、シュレーヌ市であり、セーヌ県低廉住宅公社の狙いですが、これはおおいに揺れ動きました。一貫した狙いが保たれつづけたわけではありません。

第一次世界大戦直後には、シュレーヌでの田園都市建設もパリが

直面する住宅問題を解決する緊急策とみなされていました。何とか事態を乗り切ろうと、そのころ大きな影響力のあった田園都市の構想に便乗しながら、多くの戸建て住宅がつけられたように思われます。だからこそ、当初、共同施設を整備する考えはほとんどなかったのです。一九三〇年代になると、ホームレスとか、多子家族とか、独身者とか、多様な人びとや家族を念頭に置いていた住宅が全体プランに組み込まれ、できる限り実現しようと試みられています。低所得で苦しい生活を強いられている家族を含め、多様な人たちを念頭において計画が立てられている点では、多くの論者がいうように、社会改革的であり人間的であったといえるでしょう。ただ、全体プランに描き込まれた施設や住宅のなかには、実現したものもあれば、実現しなかったものもあります。いろいろな事情によって、のちに付け加えられたものもありました。当面する状況に鑑みながら、また状況に強いられて、建てられる住棟・住宅の形態や種類が変わったり、共同施設が新設されたりしたのです。ハウードの田園都市とは違って生産にかかわる施設は見当たりませんが、一九三〇年代までは田園都市のイメージがまがりなりにも維持されていたと思われまます。これにたいし、第二次世界大戦後には、さらなる住宅不足が生じ、それを解消するための緊急対策を講じる必要が増し、住宅をめぐる思想やイメージの変化も手伝って、田園都市という一種の理想はどこかに吹き飛んでしまいました。そうした傾向が第一〇次事業には顕著に認められます。

シュレーヌ田園都市を担った建築家にも目を向けましょう。両大戦間期の設計を中心的に担った建築家はアレクサンドル・メトラス

です。彼は、この町をイギリス的な田園都市とフランス的な低廉住宅の組み合わせとして構想しました。最後までその考えを完全に放棄することはなかったように思います。とはいえ、戸建て住宅の屋根を傾斜のついた屋根から平らな屋根へ変えています。平屋根の採用については、モダニズム近代主義建築運動を意識していたことはまず間違いありません。他方、戸建て住宅、集合住宅のかたちや高さに変化をつけることも試みました。こうした設計上の試みには建築家メトラスの個性が反映しているように思います。メトラスが引退して以降、第二次世界大戦後になると、もはや田園都市のイメージは重んじられなくなっていました。

住民の願いや思いにもちよつとだけ触れましょう。一九三〇年代、住民のなかから二つの要求が生まれセーヌ県低廉住宅公社に突きつけられたことを、資料から知ることができました。一つは、高齢者向け住宅には浴場がないから、入浴できるようにしてくれという要求です。もう一つの要求は、田園都市のなかに郵便局が欲しいというものです。残念ながら、これらの要求が直接に何らかの成果をうんだかどうかは確認できません。もちろん現在の高齢者向け住宅に入浴施設がないとは考えられませんし、郵便局も今ではカトリック教会のすぐ横に立地しています。ここで問題にしたいのは、実現したかどうかということより以上に、当初の構想時には、施主も建築家もそういった住民の願いを視野にいれていなかったということであり、こういった住民の願いを取り込みながら田園都市は建設されたということです。このことにも関連して付け加えますが、店舗や事務所のスペースは、幹線道路ぞいや公会堂や教会のある広場の周

困に並ぶ集合住棟の一階に設けられました。他方、田園都市のなかでは酒場の営業は禁止されていたはずで、しかしながら、だからといって、ここに住む人びとにとつて酒場が無縁の存在であったかといえ、そのようなことはありません。シュレーヌ田園都市の近隣には街並が徐々に発達しましたから、それにともなつて商店も酒場も増えていきました。つまり、アンリ・セリエやセーヌ県低廉住宅公社が期待したように、酒場のない「道徳的」な居住空間が田園都市のなかには現出したかしませんが、彼ら住民が酒場や酒に馴染まなかつたわけではないのです。ここでもシュレーヌ田園都市は閉ざされた居住空間、生活空間ではありえませんでした。

これらは、しかし、住民の願いや思いをめぐる断片を切り取つたに過ぎません。やはり、彼らの実態に正面から向きあい、それを踏まえて彼らの思い、願いへ接近することが求められています。

おわりに

こうして見てきますと、現実の田園都市は、施主と建築家と住民と、少なくとも三者が相互に交錯するなかではじめて成立したと分りになるでしょう。施主も建築家も構想や設計の段階では、住民の生活や思いに必ずしも十分な配慮を払ってはいませんでした、建設が具体化していくうちに対応の幅を広げるようになっていきました。したがって、誰か(シュレーヌについていえば例えばアンリ・セリエ)によつて、田園都市がつくられたと素朴に述べるとすれば、それは実態からかけ離れた言説に過ぎないといわざるをえません。要するに、さまざまな力や思いが合して、ようやく都市はで

きあがるということ、これが本講演でもっとも主張したかったことです。しかも、実は、都市の建設自体がさまざまな条件に左右され、部分によつては、できたりできなかったりもするのです。

シュレーヌ田園都市をめぐつて、私はおおよそこういったことを考えています。また、そこから少し進んで、誕生した田園都市に住民たちのコミュニティはできたのか、もしコミュニティができなかつたとしたら、何かその代わりを果たしたのか、そういった問いを立ててみたいとも思っています。このあたりが今後へ向けた展望ということになるでしょう。

長いあいだ耳を傾けていただき、まことにありがとうございます。

(付記) 本稿の作成にあたって主に用いたのはシュレーヌ市立文書館 Archives Municipales de Suresnes (近年は Archives Communales de Suresnes が正式呼称とされている) 所蔵のシュレーヌ田園都市にかんする資料、および現地視察で得ることのできた情報である。なお、本稿では、中野隆生「パリ郊外の形成とシュレーヌ田園都市 一九二六―四六年」(中野隆生編『二十世紀の都市と住宅 ヨーロッパと日本』、山川出版社、二〇一五年)のシュレーヌ田園都市建設にかんする部分のさらなる展開を試みている。同論文をあわせ参照いただければ幸いである。